

明治二十六年下船し二人は日本用独歩兄弟がいたといふことにならう。

さうして日清戦争中佐伯回清合資会社を設ける運びとなり、又小栗氏を命により、大阪商船社長中橋徳五郎へ後文部大臣、政友会代議士の許に、三代目弥吉へ後小栗藪名が遊学に行つたのは大正五年頃であつた。

前述した通り、初代弥吉氏が藤原の縁を張つた十一年から十六年にかけて、佐伯町と葛の道は逆じた。明治三十一年葛原道と命名されたものは、国道三十六号線（現在の国道十号線）の前身から上岡までであつたのを、上岡より阜頭まで接合し落成し左のは明治三十六年であつた。この間さまの明治二十五年八月平岡港に先立つて、同年の警報傳号機、建設となり、大分陸羽築に先立つてと約三十年前にして測候し、その後二十年を経て葛原と起点として国道を結ぶ道路の幹線は成つたのである。

（大分港は明治四十二年二月一日大分藩憲意見書と知事に出し、四十二年二月藤原の許可を内務大臣に受け、四十五年三月十日藤原の企業式を挙げられたるなり）（佐伯城築建史）

（つづく）

細行 藤河内から北川へ

文 羽 柴 弘
俳句 吉 田 雅 雄

七月二十七日 日曜 快晴

一昨年承の念願を胸に高水会長以下二十人の会員を乗せたマイク口バスは、路を見明峠にとつて字目に入る。

塔敷基大はなればの下に古り（見明）長良子

塩見園から重岡に出て、女性キリシタン「るいざ」の

墓を訪う。比類ない立派なものである。

草の露るいざと読める耶蘇の墓 同

重岡から田原に出て北川ダムのはもとを車は走る。こへをたどり、すべて山文山。谷間には水田が開けている。

山源き藤原らうさ田も昔田 同

藤原より北川を歩けり、藤河内の溪谷に入る。

岩置走る清水を掴みもして 同

岩に咬く小草に清水 飛沫して 同

清らかな谷の底には汗を洗い、楽しい昼食をする。茶寮昔平川会館へ夫人への谷がかないのかさひい。午後一時半一行は車に乗り北川の底にはそくて、一気に熊田まで出、国道を下つて俵野に至り、西南後西御薩盛藩陣の家に数々の遺品など見、程近い裏山の墳々件尊中陵伝説の古墳を訪ぬる。

南洲に二夜宿せし夏産敷 同

それから引返し、熊田に戻り川向うの古禅寺にまいる。ここにも南洲は一晚とまつている。南洲が用いたという古風な茶碗など鮮見する。

この日最後の探訪先は市棚敷から川を隔てて、程近い瀬口の「かとうさま」。長高知の峯で最期をこけた佐伯惟治の頭を葬つたとの伝承の地。小さなお堂に惟治の戒名など記した墓石二基があり、堂の後に宝篋印塔が一基。

花塔とまとい首塚朽ち欠けし 同

蚊の藪や塚守り継ぎし琵琶法師 同

なにしろ日照りつつきの盛夏、字目から北川の道のほこりと暑さにいささか疲れる。然しほんとはよい探訪の旅で、六時前に佐伯に帰着した。（おわり）

読物

梅津 礼城物語 (四)

— 実用挿巻「本朝記」による —

高橋 智 編

(会員・南海郵船 赤坂三股)

(承前)

高橋は太郎の方を向き、「間違いはござりませぬ。おの昔は自分に見込みが立ちませぬ時には、金輪際主命でも拒みます。それより討手せし十人ばかり番匠を討までおつかわし願いとござります。」

「使僧一行は二十人程と申すに、討手も二十人でよいのか。」

「いや、おの帯刀が十人分位は働きます。」

島津の使僧玄西堂の一行が、切畑の腰掛茶屋で馬を降し休息しているところへ、杉谷帯刀が四、五人の従者を連れて馬を乗りつけた。

「これはこれは、島津の御使僧であるにますか。拙者も佐伯の家で高畑伊予守ぬにて、杉谷帯刀と申す不承者でござります。この度は両家の和睦の成立、いれ多分そのおかげおこしと推察いたし、主人太郎殿をはじめ一回御喜雀躍の体におござります。城迄は程近けれど、番匠や測と申す難所もござれば、おけがなきよう御案内申せとの主命にて、拙者これまでお迎え仕りましてござります。と先刻とはうってかわつた別人の如く、舌なめらかに挨拶した。

玄西堂は二本の指はつまみかけた黄の餅を木皿の上に

度そうとせせず、上半身を杉谷の方に捻じ向けて、「なに、杉谷帯刀、佐伯太郎の家来の——」

「はあ、高畑伊予守内か。」

「それではその名をば又昔じやかう。まあよい、それで太郎は降参と申しおるか、和睦と申しおるか。」

「降参にまれ、和睦にまれ命は別茶はなく、佐伯の家がつかれさせねば大友を捨てて、島津様につくと評議も一決しておりますれば、はッ、はッ。」

と律義らしく肩で息をした。

玄西堂は没茶と共に餅の残りもゴクリとのみ下し、「そうじやろう。そうじやろう。そうなうてはならぬことじや。見えさい、大友も近いうちにつかれる。ことじや。よつたら毛利も豊臣もつかれる。目先の見えぬ奴共が島津に手を引くハいじやが、そんなことをしたら必ずよろしくない。太郎が島津に降参すれば誰か仕合せでもない、そんな佐伯の仕合せ家中の仕合せ、目先の見えぬ主人をもつてそんな等は仕合せじやのう。」

と空うそぶく下で帯刀は「はッ、はッ」と鼻の頭の汗を拭いた。

玄西堂は自分の虚勢が完全に功を奏したと思つた。相手の格闘は云々見かけ倒して何と云うちらはこれ程虚勢を張るには及ばなかつたハか知りぬが、それとも安外利巧な男で、こちらには到底歯がたゝぬと見て、素直になつたものとすればその素直又愛すべし、とかが、問ひか答えつつ、心と心が入つていた。

気がついてみるといつの間にか酒肴が運ばれて、料亭か徳利を片手に持っていて。

「これはどうして——」

と玄西堂はちよつと左じろいた。

「まを日も高うござりますから一口色しおかりまして。」

と、無器用に徳利をひねりまわした。玄西堂は左の手を
逆に大股に突つくり、左肩をあげて右手に盃を起しむが
ら、

「でも、なんとかが測という難所があるであらう。」
「番匠が測、いや難所ではござりますが、その左めに
拙者等お迎へに上りましますようなわけで、はッ、はッ」
と、満々と酌をした。玄西堂は、

「うは、は、は、難所を恐れては旅は一步もでけんかう、
と云う言葉尻と一緒に、盃の方へ唇をとがらせる。従者
と従者との間でも酒盃がはじまっています。従者
玄西堂はここの柔順な大男に千ヨツヒリ機嫌ととりをく
なつて、

「和談がととのえばそなたもあしも同様じや。これを師
縁にな。」
杉谷は恐縮してしまひ手にせる徳利を下に置いて、
「重々のお引立に預りとう存じます。」
と頭を下げた。玄西堂は「べけ縁に盃を返し、杉谷にも
さしをけれども一二杯で目のふちまで赤くして、
「拙者はいたつて不重宝、それにお迎への大役も控えて
おりますれば——」
「は、は、は、貴公は見かけ倒しじやのう、どれ日の暮れ
ぬうちに掛けるといふそうか。」
「さよう、丁度刻限も宜しうござりますれば——」
腰をあげた。夕日は釣瓶落しに落ちて、一行が腰をお
けて小さな行列を組み終るころ、杉谷はいつの間にも用意
したものが数十本の松明を、玄西堂以下十九名にば
つてまわつた。玄西堂はこれが自分の冥路を照らす松明
とは知らぬから、
「これはかをばけない。」
といつて受け取つた。

杉谷は一行の殿^{とんぼ}りとつとめた。後から敵が追ってくる
でもないハに、こればかりと妙だと玄西堂は酔つた頭にも
不審であつたが、心中「シヤコッ鈍大漢、何すかよのそ」
と舐めきつていたから、それ以上氣をまわすこともなく馬
首を進めた。

一行の先頭は日城兵の一人が番外の大松明をふり照し
て道案内に立つた。みると殿りの杉谷も番外の大松明を
肩にかついで馬を進めている。

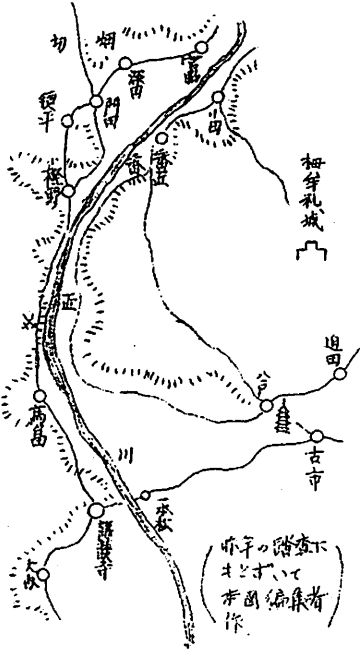
玄西堂は馬に揺られて、いゝ気持に酔がまわつた。彼
としては何も問題はないかつた。左だいなむりして落馬せ
ねば、梅竿礼城はひとりで自分の懐に飛びこんで入るも
のと油断した。

道は番匠川の縁に出て、番匠ヶ淵の難所が近づいた。
杉谷は一向に、
「これからいよいよ難所ばかりです故、足もとにお
氣をつけられて——」
と注意した。

杉谷の馬はとかくおくれがちである。それもそのはず
体重二十五貫、丈六尺をこえている。しかし杉谷にとつ
ては問題でないである。行く手は番匠ヶ淵まで一本道

番匠ヶ淵への道

(必行のこのがその現境か)



古手山、左手山、その先に同味方の伏兵が鯉口をくつらげてまわっている。もし伏兵から逃げようとするれば後戻りするより外はない。しかもその道は自分がかぶさっている。一行はもう察の氣で三途の川を渡るのは時間の問題である。

物すがい叫喚が行く手に起つたと思つたら、斬合がはじまつた。五振子である。杉谷は打物の音に耳を傾けつつ自分自身も鯉口をくつらげて、逃げて来る者があれば始末しようという氣である。

果して一人二人こちらを向つて逃げてきたら、杉谷は左の手にせる大松明を出来ちかぎり前方につき出して、その光の中に敵を包み

「逃げようとしても逃がすまいか。」とおれ鐘のような大声でどなりつけた。中には血まみれになつてゐる者もあつてか、杉谷の骨盤があまりに痛く、その声が届かぬ方もなく、誰一人彼と交り打ちをしようとする者もなく、再びそこから引返さずにはいられた。こゝろに十九人の一行は十八人まで討取られた。

玄西堂は酔つてゐたので、今の一番は首を白ねられた。左が一人、甲斐宮内なるものは杉谷の大鳴をものともせず、馬から降りて組背いて来た。杉谷も馬から降りて宮内への横づらをかき張り張りとばした。そのはずみ宮内はドボンと水しぶきとあけて齋匠を淵に入水した。幸い彼は水練の達人であつたので、岸に泳ぎついて辛くも一命が助かつた。残る十八人はこゝとこゝと首帳に書きあげられて、臼杵丹生島なる大友宗麟に披擲された。

宗麟は佐伯太郎母子の操守と杉谷の流勇を賞し、帯刀の主人高畑伊豫守も一方ならぬ面目をほどこした。

島津勢は佐伯太郎という少年の、志操の堅固なるに舌をまいた。立花宗茂といひ佐伯太郎といひ、當年十八才の若くは島津にとつては共に苦手であつた。

寄せ手の部將土持親信等は是に進み、翌四日には岸河川に放火し、不堅固な兵を退かしたところ、太郎は早くも兵を出して寄せ手に逆襲し、こゝでも島津勢は左にたがになつた。

佐伯の防禦は水も減らさぬ手配であつた。謀將山田匡徳は野津院、因尾、切畑等から城に迫する口々に城兵をくり出して、恰も一枚岩を立てた如く防備を整えた。その結果寄せてはどつ口を突破し得ず引退した。山田は「追つてはいかん、皆いそいで城にもどれ」と命令した。

然し島津勢が兵力を増強して本格的な攻撃にうつるやうな、明日以後は知らぬ籠城にほいることと覚悟せねばならぬ、重臣等は夜をこめて兵糧の搬入と指揮した。それは必ずしも喬吉勢の後詰が期待出来なかつたからである。

然るに翌日も翌々日も島津勢は未讎する氣配は見えなかつた。これは家久が作戰計画を変更して、榊原社にしばらくそのまゝにして、十三日兵糧二百余隻を載して津久見浦と間接攻撃することにしたからである。けれどこの方面の防禦も又嚴重で、塙兵部之丞、加島中務等協力して寄せ手を追拂つた。

家久の佐伯攻めはかくの如く陸に海に失敗した。といつてこゝで意地づくで戦斗して暇どつたならば、続々と兵力を増強し圧力を加えつつある上方勢の爲に、全島の戦機を誤るおそれがあるので、そこは薩摩軍人の思ひきりよく、大野川沿いを下りつゝあつた義珍の本隊に

(以下はページ上段中絶)

以上の様に、この峠は古来多くつねもの足跡を成
した所であるが、黙して語らず岡谷の士の訪れを待つま
への標であつた。

駈句二三。

つねもの 足跡空し 峠路
霧雨に 馬場の尾々松 影おほろ
峠にて 大氷を想い 感無量

(おわり)

合流した。
(21ページよりのつづき)

(完)

(附記) これは天田柳雲先生の「木蘭記」より採得した
もので、よくしらべつめて書いてあると思つた。
本文は軍評定ノ場と番頭測に使者を斬る場と主
とし、その前後は畧した。
この文中、切畑ノ茶屋とはどこ附近にあつた
のである。又番頭ノ測とはどこであるか。
おそらく根野附近ではあるまいか。詳しい方が
何かの機会に教えてもらいたいものである。

(以上)

研究

佐伯の港はどんな働きをしてゐるか

——主として木材の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校

教諭・岡本徹士 志ツラガ 彌朝

学生会員 市野 瀧

仁

(女) 葛 港

はじめに——葛の地名

一世紀も二世紀も三世紀も昔から河川に發生した港は、
せんじ海に下りてきた。それは日本の狭い山がちな地形
からくる必然的な運命であつて、ひとり佐伯地方だけの
現象ではない。また河川に港があるとすれば、余程の特
異な条件がそつた所で、あつてもその経済的力の程
は論ずるまでもないであらう。最上川、利根川、木曾川、
淀川にできた港等、すべてその例外ではない。こうして
日本の河川に比して、ヨーロッパの河川は全く對照的で、
内陸部の輸送に利用されてゐる点では、昔と変らない。
それにもかゝらう、河川交通のない日本が近代化に不
み切つて一世紀たつた今日、國民総生産が自由諸國中、
世界第二位に上つたことは驚くべきことだと、内外
の注目を浴びてゐる。一体原因は何んであるか。外因
の知識人もいろいろの角度から焦点をあててゐるが、そ
の中の一に、日本の港は、すべて海に直接面してゐるか
らだと指摘した学者がゐる。この単純、素朴な意見が大
胆な見解を知つて、私は世界地図をひらいて見、新に日
本の地図をたしかめて見た。

狭い一地方でも原理は同じである。葛港が直接豊後水
道に面した港であることは、時代を忘れて、貨物の搬送
を変化しつつ、以前よりまして佐伯地方の発展に寄與し
てゐることは事實である。

さて葛の地名に關しては、佐藤藏太郎氏の「佐伯港発
達史」は「此辺の荒磯は元崎と呼ぶを左るを、何時しか
口音と抜きてカヅラとは呼ぶに似すに至りたるなり。因つ
てカヅラには何の意義もなく、川面は鼻面林と同標、地